私の作家評伝 Ⅱ

—四迷・泡鳴・虚子・花袋・蘆花・啄木—

小島信夫

新潮選書

私たちは過去の文学者を遠い存在と思ったり、その反対に近くにひきつけ過ぎたりする。しかし、彼等は、そのどちらでもなく、一個の存在としてその独特な一生を過したのだ、というふうに私は思う。この集の文学者についても、私はかなり勝手なことを述べているように見えるかもしれないが、気持としてそのようなことなので、そのためには私自身を出来るだけ自由に解放したつもりであるし、それが私の喜びでもあった。　著者

云 II

— 四迷・泡鳴　　・花袋・蘆花・啄木 —

小島信夫

新潮選書

私の作家評伝 II
——四迷・泡鳴・虚子・花袋・蘆花・啄木——
〈新潮選書〉

© Nobuo Kojima Printed in Japan 1972

昭和四十七年十月十五日 印刷
昭和四十七年十月二十日 発行

定価五〇〇円

著者 小島信夫
発行者 佐藤亮一
印刷 株式会社 三秀舎
製本 株式会社 大進堂
発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
電話東京(〇三)二六〇局一一一一
振替東京八〇八番

(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

もくじ

男子一生の事業／二葉亭四迷　5
不易の人／岩野泡鳴　45
其中に金鈴を振る虫一つ／高浜虚子　87
平坦地の詩人／田山花袋　129
明治の弟とその妻／徳冨蘆花　169
渋民小天地／石川啄木　217
あとがき　259
索引　268

插画・坪内節太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

私の作家評伝 II

——四迷・泡鳴・虚子・花袋・蘆花・啄木——

男子一生の事業／二葉亭四迷

元治1年　江戸市ヶ谷尾州上屋敷に，長谷川吉数の長男辰之助として生る

明治13年　森川塾に通う，これまで陸軍士官学校三度受験するも不合格

〃 14年　東京外国語学校露語科入学

〃 19年　東京商業学校露語科退学，「小説総論」発表，「父と子」訳

〃 20年　「浮雲」第1篇，二葉亭名乗る

〃 21年　「浮雲」第2篇，「あいびき」「めぐりあい」訳

〃 22年　「浮雲」第3篇，「落葉のはきよせ　二籠め」

〃 23年　「落葉のはきよせ　三籠め」

〃 24年　「浮雲」合冊

〃 25年　「悲壮体院劇論解釈」訳

〃 26年　福井つねと結婚

〃 29年　「片恋」訳，つねと離婚

〃 30年　「肖像画」「夢かたり」「うき草」訳，「作家苦心談」

〃 31年　「猶太人」訳，「小説文体意見」

明治35年　高野リウと結婚，外国語学校教授を辞しハルビンへ

〃 36年　帰朝，「戦争と平和」訳試みる

〃 37年　「つつを枕」訳，「露西亜の婦人界」，大阪朝日入社

〃 38年　「猶太人の浮世」訳，「ひとりごと」

〃 39年　「ふさぎの虫」「むかしの人」「根無し草」訳，「予の愛読書」「老の繰言」「余が言文一致の由来」「其面影」

〃 40年　「二狂人」「狂人日記」「乞食」訳，「写生文に就いての工夫」「閑人」「露国文学談片」「平凡」

〃 41年　「文壇を警醒す」「予が半生の懺悔」「うき草」，朝日新聞露西亜特派員として渡露

〃 42年　「露都雑記」，5月，肺炎及び肺結核の為，帰国途上ベンガル湾洋上にて没（45歳）

たいていの小説家というものは、若い頃に有為転変の生活を送るが、あとはひたすら小説業に励むというものである。そうでないとしても、まるで地震にゆさぶられているみたいに絶えず身心共に動き続け、自分の書いている小説にケチをつけ、自分が学んだ外国の文学にもケチをつけ、いわんやその外国そのものに対しても敵国として用心せよ、といい続けたりするような人は珍しい。二葉亭とはそういう人だ。まことに書きにくいし、いささかうんざりしてしまう。

早い話が、二葉亭四迷、という名が、御承知のように彼自身の言葉によれば、クタバッテシマエ！ という意味だそうである（「予が半生の懺悔」）。『浮雲』第一篇を本にしたときに、こんな自嘲的な名をつけて出したのも変っているが、それというのも坪内逍遙の名を借りて雑誌に発表したそのことが金ほしさとはいえ不正直であり、「唯一つの取柄の正直」を破ったのが堪らなかったのに、書いた小説が意に満たないときているのだから、くたばるがよい、と号令をかけたり、冷々亭というそれまでの筆名をもって自からをやっつけたりしているのである。こういう態度はもともと戯作家によくあることだ。全部が全部信用する必要もない。筆者も度々皮肉な眼を向けて生涯を見守ってきたが、そのまま一生を終えてしまっているので、文字通り頭

がいたんでならない。つまり通風孔というものがないのだ。せめて男子一生の仕事らしきものをやってくれて成功してくれればよいが、肺病で外国からの帰路海の上で死ぬ。せめて彼の地で死ねばよかったが、ムリヤリに送り届けられたので、それも叶わなかった。ベッタリ挫折という文字で塗りこめられてしまっている。

彼の三つの小説が、いやそれよりは翻訳が何といっても救いではあるが、いっそのこと彼がしゃべった談話筆記のようなものの方に特徴が見える。ぐいぐいと自分を責めたり、急ブレーキをかけて別の方向に走ったりして、その短い文章の中に、曲折と変化とをもって、人生や時代そのものが、矛盾をはらんで入りこんでいる。「予が半生の懺悔」や「余が言文一致の由来」や「作家苦心談」「私は懐疑派だ」という文章は彼の面目が躍如としている。もっともこういうことを彼に対していってはいけない。そうすれば、彼は、「いやあそうでもない」と忽ち別の旗をかかげる。

私は『浮雲』第三篇執筆当時のかれの「落葉のはきよせ　二籠め」という「ノート」みたいなものを見ている時に、いうまでもなく彼が『浮雲』に愛想が尽きて悩んでいる頃なのだが、文語文のまことに奇妙な文章を発見した。

このノートのことについてはこれからあとも縷々ふれることになるが、戯文ふうのものがあるかと思うと悩みのエッセイあり俳句あり、漢文あり、露文ありといった調子で、「一籠め」には『浮雲』の文字通りノートがある。芥川龍之介でさえ、ノートや日記類は文語文で書きた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

がった。その方が口語文より三倍も早く書けるからであるというが、とりわけ二葉亭の場合は三、四十年も前のことだから当り前のことだ（漱石のノート、日記は三十四、五年頃から口語が多くなり、三十八、九年にもまじっているが、四十年をこえると殆んど口語文になる）。

さて横道へそれたが、といってもこれは二葉亭の場合は大事なことだが、しばらく元へもどして、その奇妙な文章というのはこうだ。

《余の眼はおそろしく釣上れり、如何がすへきやほとほと困しはてたり、従来未だ曾つてレルモントフ文集をよみてわらひたることはなかりしに今日同文集を取り出し、夫のメイリイの章をよみたり。よみてメイリイのペチョーリンと相見る所に至りおもはず噴飯せり、をかしき事を写したるゆゑにあらずして、作者のまじめくさりてメイリイの衰微せしさまを写すかをかしかりしなり、ミーロエチヂヤとおもへり、レルモントフは露国文学家中余の尤も景慕する人なりしに今日のみしかおもひたるは如何にそや。おもふに余の眼は釣上りしなり、眼の釣上りたるがゆゑ人の肺腑より流れ出てし言を聞きてもをかしく聞えたるならん。これおそらくは失徳の事なるべし、されどそれを承知しつゝ、尚ほをかしく覚ゆるを如何にかすへき。》

これは「嗜好論」という小エッセイの続きと考えられる。嗜好に批評なく、相対的だ、と述

べたあとに、「釣上った眼」のことをいっている。同じ作品が日によっておかしく見えたりする、ということがいいたいのだが、それにしても眼が釣上ったとは、どういうことなのだろうか。中村星湖は明治三十七年、二葉亭が「脳貧血症」を病んで田端へ引っこんだとき訪ねた印象を「極度の神経衰弱！」と思ったと書いている。これは漱石が二葉亭に会った頃と同じで、このことはいずれあとでふれるつもりだが、星湖はずうっとさかのぼって、既に明治十七年頃、父母とならんでうつっている写真にもその気配が見られるとして「尻上りの眉毛と高い顴骨とに……」と書いている（内田魯庵「二葉亭の一生」『思い出す人々』所収）。

私には医者の家に八年間いたという星湖のこの骨相学ふうの描写が「釣上った」眼と関係がありそうに思われてならない。それにしてもいったい自分で眼が釣上ったなどとどうしていうのだろうか。この表現は私の想像では、母親か父親かが、息子の彼に向って、時に口にしてたにちがいない。つまり、「辰之助、お前の眼は釣上っておるぞ」といったように、たしなめの言葉としてであろうが。そうとすればそれこそ父母と一緒に猿楽町に住むようになってから耳にしていた言葉を、自嘲をこめて、致し方ないじゃないかという意味をもこめて書いているのだ、といえよう。

星湖は山田美妙の言葉をひいて少年の頃はフザケた子供であった、といっている。私もそうだと思う。彼のフザケた調子というものは、彼の『平凡』や雑談の中にあらわれているが、私は彼の処女作『浮雲』という小説の諷刺的な扱い方の中にあらわれている、フザケと神経症と

は、無関係ではないようにも思う。

二葉亭は元治元年（一八六四）に江戸市ヶ谷合羽坂の尾州藩上屋敷に生れた。明治元年、四つの時母といっしょに名古屋に行き、藩学校（後の明倫中学）に入り、仏語も学んだ。八つのとき東京にもどり十一歳のとき父が松江に転任したのでついて行った。十四歳になって帰京する。そのあと陸軍士官学校を三度うけて落ちたあと、明治十四年、十七歳で東京外語の露語科に入学した。

名古屋、松江は共に茶の湯の盛んなところであり、特に名古屋は歌舞音曲をたのしむところであった。一人息子の彼は両親や祖母の溺愛をうけて育ったが、これがあとで彼の重荷になった。彼は清元など俗曲が好きであるが、同時に、開校された士官学校へ入り軍人になろうとする人でもあった。彼は近視のために不合格となったのだが、何故三年続けて受けたのか疑問とされている。

それはともかくとして彼が外語で露人のニコライ・グレーという教師に露文学を教わり、ドストエフスキイやゴーゴリ、ツルゲーネフ、ベリンスキイなどを通し、ロシアの事情、農奴の解放、社会主義、ロシアの思想というものを知っていた。ロシア語を自由に理解するようになっていたのだから、これこそロシア文学が丸ごと彼の中に入りこんできた。これは大へんありがたいことではあるし、だいたい啓蒙期というものは、こうしたものだが、考えてみれば、日

本語を通さずにたっぷりと無傷のままにしみこんできたこの外国の文学は、将来彼の中で矛盾を引きおこさないわけには行かない。

そこへもってきて、彼は思うところあって士官学校を受験した。それはロシア東漸というものを頭においていたというのだから、そのロシアの文学を身体いっぱいに受け入れ、しかも、その外国文学を超克しなければならない、という羽目に追いこまれざるを得なかった。だから、彼は最初から矛盾の中にいたわけであった。

彼が外国語学校に入学したとき、その前年にプーシキン記念祭の除幕式で演説したドストエフスキイは六十歳で死んでいる。本国でも必ずしも面白がられなかったこの作家を、日本の青年たちが我がことのように理解したらしいので、この露人教師は驚いている。ほぼ十年後の明治二十五年に内田訳の英訳から翻訳『罪と罰』が出はじめ、透谷や藤村らに影響をあたえ、死後約九十年たった今も最も関心を抱かれているドストエフスキイ。その作家を、当時さきに述べたような風にして理解したということは、不幸といえば不幸ではないか。

彼は外語が東京商業学校に合併されたとき怒って退学してしまった。この年には帝大が設置され、帝大に対して外語の露語科はそのまま実業的なものとなって今日に至っている。このとき彼は二十一歳、既にツルゲーネフの『父と子』の部分訳である「虚無党形気」の原稿を、その頃知った坪内逍遙に渡している。これは出版されなかったがこれをケイキにして種々翻訳を行い、翌明治二十年、『浮雲』を坪内の名義で金港堂から出版したのである。

私は不幸といえば、不幸ではないか と前にいったが、それは処女作『浮雲』がどんなふうにして出来、どんな結果となったか、ということを考察してみるとだんだん分ってくるのである。

彼は退学してホンヤクをしたり、創作にかかったりしたが、終始金は入らなかった。とうとうチリ紙まで親父の世話になるのか、といわれた程であった。父は退職し二千円ばかりの債券の利子をアテにし、それを息子がアテにする有様で、やがて、その債券も父が友人のために手放してしまい、そのために母が、離縁してもらうにも行くところもない、どうしてくれるのか、と泣いて食ってかかるのを隣りの部屋できくというような場面に出っくわしたりした。こういう生活は官報局へ勤めるまで続くのだが、それというのも彼が文学をやろうと考えていたからであった。当時の最高学府に学びながら、この有様では両親が嘆くのは当り前である。

彼の近所に、園田せい子というモダン・ガールがいた。不良少女みたいな女でもあったが、男友だちがたくさんいた。あるいは彼の猿楽町の前の家に商家の娘がいて、そこへ彼はよく遊びに行っていた。どちらが彼の頭にひらめいたか、おそらく両方であろうが、その女をモデルにして、タチアーナみたいな典型を描こうと思ったらしい。

文三という男がお役所を何が原因かよく分らぬがクビになる。彼は学生時代から叔母の家に世話になり、その娘の勢子に心を寄せている。叔母は行く行く一緒にさせようと思っており、二人も仲よくなっているところに、突然クビになる。文三がそのことを苦にしているのに勢子

の方は文三に浮き浮きと好意を示し、つい真相を打明ける機会を逸してしまう。しかしとうとう打明けたところ、案のじょう叔母はののしり、文三の友人の如才ない昇のことを賞めちぎる。これが第一篇である。

この小説は、三馬を読んだり、饗庭(もえば)の真似をしたり、第二回はドストエフスキイとゴンチャロフ、第三回はドストエフスキイの真似をして書いたといっている。だいたい彼は、逍遙にいわれて円朝の調子を入れていた。これは漱石の『猫』などと同じである。

こんなぐあいにはじめられた『浮雲』は、三馬の影響なのか、ゴンチャロフの影響なのか、ゴーゴリなどの影響なのか、生き生きとした江戸文学ふうの戯作調だとはいえ線が太く諷刺的な、現在形止めの文章ではじまる。そこへ文三がひそかに悩んでいる姿がちょっと『罪と罰』のラスコルニコフふうであったりして、あれやこれや思っていることと、ほんとうに心の中で思っていることと食いちがうところなどは、正にドストエフスキイ式でもある。

だいたいこの一篇はスリルに富み、人物の特徴もハッキリしていて、人物と人物とをリアルな感じで、浮びあがらせているのは、類例がない新しさであったのだが、その面白さを作っているのは、ほかでもない。それは、文三がひとり悩んでいるのに、勢子や叔母の政子がまったく知らずにいる。そのため文三は一層心苦しい。そういう文三の苦悩をよそに勢子があいかわらず部屋へやってきたりする、その二つのくいちがいというものが、この書き方でもって生きている。ところが、文三の秘密が洩れてしまったあと、お勢やお政が変貌し、そのため文三の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.